

して掲げられて居り、そうして岑穩僧法王以外には一ツとして法王の上に僧字を有するものは無く、瑜罕難法王・盧伽法王・摩矩辭法王・明泰法王・牟世法王の如く、ヨハネ・ルカ・マコ・マタイ・モーゼ等の名は直ちに法王といふ語に接して居る。此等の例に依れば岑穩僧の三字はまた必ず人名であるべきで、決して僧字は梵語の *sangha* を寫したものであるべきではない。岑穩二字の唐代の音は *sim-won* であつたであらうから、これは勿論シモン (*Simon*) の對譯に相違ない。ところでシモンはまたペテロ即ち「石」と名けられたことは、新約聖書にも見えてよく知らるゝ通りである。さてペルシャ語では今も石を *sang* といひ、ル・コック (*Le Coq*) 氏が吐魯番で得たシリヤ字ソグド語の新約書抄には、馬太傳第十章第二節の「ペテロと名け給ひしシモン」のシモンに對して *sim'on*、ペテロに對して *sang* と書き、また約翰傳第二十一章第七節の「シモン・ペテロ」に對しては *sim'on sang* と對せしめてある。これに依りて考へると、岑穩僧の三字はソグド語を以て對せしむればこの *sim'on sang* 即ちシモン・ペテロに當ると考へられる。従つてこの志玄安樂經に見える岑穩僧伽も、同様にまた此の語に對せしめたものに相違ない。たゞこれには伽字を添えて僧伽の二字を用ゐて居る。この經中の固有名詞が何れの國語の音譯であるかは今判然定め得ないが、暫くソグド語について此の形を求めて見ると、前に引いた *sang* (石) の外に、語尾の鼻音に *a* 母音を伴ふた *snk'* 即ち **sang'a* なる形のあつたことは明らかである。^⑥ それで僧伽はこの種の形に對應せしめたものであらうと思ふ。たゞ念の爲に附け加へて置きたいことは、前の *sang* はシリヤ文字で書いた形であり、*snk' = sang'a* は所謂ソグド文字で書いた形であるから、此等の兩形は時代や場所の相違に歸するよりも、或は用ゐられた文字の相違に依つて生じたものかとも思ふ。果してかく考へて差支へないならば、恰かも梵語の *Sangha* を